



中国語における擬音語の様態の指定

游, 韋倫

(Citation)

神戸言語学論叢, 9:45-55

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005929>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005929>



中国語における擬音語の様態の指定

游韋倫

神戸大学大学院

1. はじめに

本稿は、中国語の擬音語を対象に、様態(音源の動きの実現の仕方)の指定について考察するものである。中国語の擬音語において、無気音・有気音による音象徴的意味は、日本語の無声音・有声音における意味と比較されることが多い。例えば、香坂(1983:254)によると、枝が折れたときの音を表す「ぼき」「ぼき」に見られるような、音源の大きさを区別する弁別的特徴は中国語にはないとされる。一方、野口(1977)は、中国語の無気音/b/と有気音/p/ (音声表記では[p]と[pʰ]であるが、以下では音素表記で示す)の例に関して、接触音を表す *ba*¹ と *pa* では、後者には前者より動きが大きくて勢いのよい感じを伴うようであると述べているものの、はっきりした結論に達しているわけではない。また、武田(2001)は、金属製の物の接触音 *guanglang* と *kuanglang* を例に、現実音が大きいことを表すときに後者(有気音/k/)を選択することがあるが、必ずしもそういうわけではないという。それに対し、香坂(1983:254)では、*kuanglang* は音の大きさや動きの強さを区別する「かちゃん」「がちゃん」両方に対応できることから、中国語の擬音語には日本語のような繊細な区別はないと指摘されている。

以上に挙げたミニマルペアから見ると、日本語の擬音語における無声・有聲の対立は、音の大きさ、音源の大きさ、動きの強さといった側面を反映しているが(音源の大きさに関して、針生・趙 2007 の実験的調査も参照)、中国語の無気・有気の対立はそうではないと考えられる。次に、接触音を表す *pa* の事例を見てみよう。

- (1) a. 啪 的 一 声 轻响²
 pa de yi sheng qingxiang
 S QUOT 1 CL=音 軽い音 (とんという軽い音)
- b. 轻轻 地 拍 门: 啪啪啪。
 qingqing de pai men pa pa pa
 軽い ADVL 叩く ドア S (とんとんとんと、軽くドアを叩く)
- c. 啪, 一 颗…(略)… 泪珠 拍 在…。
 pa yi ke leizhu pai zai
 S 1 CL=粒 涙の粒 当たる LOC (ぼとっと、一滴の涙が…に落ちた)
- (2) a. 用力 关上 了 房门, 啪 的 一 声。
 yongli guanshang le fangmen pa de yi sheng
 力強く 閉める-閉まる PFV 部屋のドア S QUOT 1 CL=音
 (ばたんと、部屋のドアを強く閉めた)

- b. 电视机架 便 咣 的 一 声 碰 在 地板 上。
 dianshijia bian pa de yi sheng za zai diban shang
 テレビ台 すぐ S QUOT 1 CL=音 ぶつかる LOC 床 上
 (テレビ台がすぐばたと(床に)倒れた)

(1) と (2) は北京大学中国語学研究所の現代中国語コーパス (以下、CCL と呼ぶ) からの用例である。比較すると分かるように、音や音源の大きさ、また動きの強さに関する情報は、文脈の表す状況によって付加されるものであり、*pa* (あるいは有気音/p/) には含まれていないと考えられる。

また、(3) と (4) にも示すように、中国語の擬音語にも大きさや強さなどの指定を持つものがいくつか存在するが、そのような指定は子音が付与するものとは考えられない。(3a) の /g/ は相対的に小さいと想定される無気音であるが、*ga* は一般的に大きい音を表す。

- (3) a. *ga*: ①アヒル、雁などの大きい鳴き声 ②物が軋むときの大きい音
 b. *honglong*: 機械、雷、爆発などによる大きい音

- (4) a. *xili*: 小雨が降る小さい音
 b. *sha*: 軽くて薄い物が摩擦するときの小さい音

以上の事実から見ると、中国語の擬音語において、無気・有気の対立は大きさや強さの区別に結びつかないと考えられる。そのため、氣息の有無がもたらす音象徴的意味を追究することが有効であるのかを検討することが必要となる。本稿では、これを含め、音韻的考察および意味的考察を通して、次の2つのことを主張する。1つ目は、音源が音を生じさせるときの動きを伴わない擬音語は、様態の指定を持たないということである。2つ目は、中国語の擬音語において、有気子音と摩擦音は音象徴的に動きの速さという様態の指定を持ちやすいということである。

本稿の構成であるが、2節では音が発生する事象から音の役割と音源の動きの様態を検討する。3節では音源の性質による様態の指定を考察し、4節では音象徴的意味による様態の指定について考察する。

2. 発生音と付随音

中国語の擬音語は副詞としての用法が基本的である (馬 1997; 李 2007 など)。この点は日本語と同様である (田守・スコウラップ 1999 など)。日本語の擬音語に関して、仁田 (2002) は、様態副詞を考察する際に、擬音語が表す音を「発生音」と「付随音」に分けている。発生音は、音が主役として解釈された事象の中で、どのような音が生じるかに注目するものである。一方、付随音は、物理的な動きに主眼が置かれた事象の中で、音がその動きに伴って起こるものである。³ 両者の違いは、共起動詞の性質に反映される。(5) の例を見てみよう。

- (5) a. 旗が**ぱたぱた**と { 鳴っている / 音を立てている }。(発生音)
 b. 旗が**ぱたぱた**揺れ動いている。(付随音)

(5a) は擬音語が音の発生を指し示す動詞 (「鳴る」「音を立てる」) と共起し、発生する音がどのようなものかを表している。それに対し、(5b) は擬音語が物理的な動きを指し示す動詞 (「揺れ動く」) と共起し、その動きが実現するとともに音が付随的に放出されることを表している。後者の場合、音の発生を表すと同時に、<強く><激しく>といった様態も描写し、旗が激しく揺れ動いているというように解釈される。音が様態の指定を持ちうるのは、音は音量や音質を持ち、音を発生させる動きの勢いや速さも含意するからである (仁田 2000: 118; 新川 1979 も参照)。

中国語の擬音語も同様に、共起動詞の違いにより発生音と付随音の区別が観察される。⁴ 下に挙げる (6a) と (6b) は、擬音語 *pa* が<発する><鳴る>などを表す動詞と共起し、ドアを閉めたときに生じた音がどのようなものであるかに注目する表現である。一方、(6c) は、*pa* が<閉める>という動きを指し示す動詞と共起し、ドアを閉めたときに音の発生が付随的に伴うことを表す表現である。

(6) *pa*: 物同士が接触するときの音

- a. 關 門 時 發 出 了 啪 的 聲 音。
 guan men shi fachu le pa de shengyi
 閉じる ドア とき 発する PFV S QUOT 音
 (ドアを閉めたときにぱたん／ぱたんという音がした)
- b. 關 門 時 啪 的 一 聲 響 了。
 guan men shi pa de yi sheng xiang le
 閉じる ドア とき S QUOT 1 CL=音 鳴る PFV
 (ドアを閉めたときにぱたん／ぱたんと鳴った)
- c. 門 啪 的 一 下 關 上 了。
 men pa de yi xia guanshang le
 ドア S QUOT 1 CL=回 閉める-閉まる PFV
 (ドアをぱたん／ぱたんと閉めた)

中国語の擬音語において、(6b) のように、一回限りの音を表す単純形擬音語 (A 型と AB 型) と後接動詞との間に「一聲」が付加されることが非常に多い。ここで、「一」は数詞で「聲」は音の発生回数を表す量詞である。また、A 型ではさらに引用標識「的」を付加することが一般的であり (例えば、「啪[?] (的) 一聲」)、AB 型では付加しないことが多い (例えば、「啪啦[?] (的) 一聲」)。複数回の音を表す際は、「啪啪兩聲」(ぱたんぱたんという 2 回の音)、「啪啪啪三聲」(ぱたんぱたんぱたんという 3 回の音) のように表現される。

「一聲」のほかに、(6c) のような「一下」の付加も観察される。⁵ 「下」は動きの発生回数を表す量詞である。A 型は前述の場合と同様、「的」の付加が一般的である。劉・潘・故 (1984: 134) によると、「下」は一般的に短時間の動きを表すことが多い。「下」も、「啪啪兩下」(ぱたんぱたんという (2 回の) 動き)、「啪啪啪三下」(ぱたんぱたんぱたんという (3 回の) 動き) のように複数回の動きを表すことができる。

閻 (2001) によると、単純形擬音語の「下」との共起は速い変化に注目するものであるとされる。⁶ 次の用例から分かるように、「一聲」と「一下」の違いは、前者が音に、後者が動きに注目するという点にある。

(7) *sou*: 気体が素早く動く音

- a. 我 { 聽見 / 看見 } 箭 嗖 的 一 聲 射 了 出 去。
 wo tingjian kanjian jian sou de yi sheng she PFV chuqu
 私 聞こえる 見える 矢 S QUOT 1 CL=音 射る 入る 出る-いく
 (矢がひゅんと飛んでいくのが聞こえた)
- b. 我 { 聽見 / 看見 } 箭 嗖 的 一 下 射 了 出 去。
 wo tingjian kanjian jian sou de yi xia she PFV chuqu
 私 聞こえる 見える 矢 S QUOT 1 CL=回 射る 入る 出る-いく
 (矢がひゅんと飛んでいくのが見えた)

「一聲」と「一下」は、意味的には焦点 (音か動きか) の違いによる異なる表現であるが、音韻的にはリズム (4 音節) を安定させるための手段とも考えられる (野口 1995)。これらの付加は必ずしも必須ではないものの、多く使用される。4 節でまた検討するが、「一下」は特定の子音と有意に共起する傾向が観察される。

本稿では深く検討しないが、持続の音を表す擬音語が持つ様態を簡単に説明する。一回限りの音に対し、持続の音を表す AA 型、ABAB 型、AABB 型、ABCD 型の擬音語は形式（構文）がもたらす様態の指定を持ち、付随音として表現されることが多い。張 (2012) によると、AA 型の擬音語が指示する音は ABAB 型に比べてスピード感が強いという。また、AABB 型と ABCD 型の擬音語が指示する音は、リズムが乱雑なイメージを持つ点で ABAB 型とは異なる。

(8) AA 型：＜速く＞

硬幣	嘩嘩	地	掉	出来。
yingbi	huahua	de	diao	chulai
コイン	S	ADVL	落ちる	出る-くる（コインがじゃらじゃらと落ちた）

(9) AABB 型と ABCD 型：＜乱雑に＞

- a. 乒乒乓乓 敲打 碗盤。
pingpingpangpang qiaoda wanpan
S 叩く 食器 （食器をかんかん叩く）
- b. 冰雹 劈哩啪啦 掉 在 屋頂 上。
bingbao pilipala diao zai wuding shang
ひょう S 落ちる LOC 屋根 上
（ひょうがぱらぱらと屋根に落ちた）

以上、中国語における発生音と付随音の違いを検討した。3 節では様態の指定に関する制約を見る。

3. 様態の指定：音源の性質による制約

前節で検討したように、擬音語が付随音を表す際には、動きの発生の仕方（つまり様態）を規定しうる。一方、音源の性質により共起する動詞を制限することもある。例えば、音を立てる音源が動きを伴わない場合や、それが明確でない場合では、擬音語は動きを指し示す動詞と共起しにくく、発生音として表現されることが多い。例として、(10a) のような電子音 (bi) や (10b) のような内部の回転による機械音 (honglong) が挙げられる。

- (10) a. 電子儀器 哩 的 一 聲 { 響 / *動 } 了。
dianziyiqi bi de yi sheng xiang dong le
電子機器 S QUOT 1 CL=音 鳴る 動く PFV
(電子機器がびーっと鳴った)
- b. 馬達 轟隆 一 聲 { 響 / ??動 } 了。
mada honglong yi sheng dong xiang le
モーター S 1 CL=音 鳴る 動く PFV
(モーターがごーっと鳴った)

(10a) の bi は一般的に電子機器（電子ロック、医療機器など）から発する高い音を表し、物理的な動きの発生は伴わない。(10b) の honglong も、機械の内部の回転（モーター、エンジンなど）による大きい音を表し、音源の音を生じさせる際の動作が容易に特徴づけられず明瞭ではない。これらのものは、音量や音質の指定を持ちうるが、様態の指定はないため、発生音として表現されやすく、付随音として表現されにくい。

発声器官を利用した生物の音を表す擬音語も、音量や音質の指定しか持たないと考えられる。例えば、次の (11) の jiu はネズミや虫や鳥の鳴き音を表す擬音語で、音源（発声器官）による動きは電子音、機械音と同様に明瞭ではないと考えられ、発生音として表現され

ることが多い。

- (11) 老鼠 啾 的 一 聲 叫 了 起來。
 laoshu jiu de yi sheng jiao le qilai
 ネズミ V QUOT 1 CL=音 鳴く PFV -はじめる
 (ネズミがちゅーと鳴いた)

人間の声の場合も同様であると考えられる。ただし、人間の声は、喜怒哀楽といった感情を伴って放出されることが多い。この場合、様態的情報が感情を表す共起動詞によって引き出される。(12) の *wa* は人間の大きい泣き声を表す擬音語である。「泣く」という動詞と共に起するとき、泣くときの音量のみでなく、泣くときの表情の変化や口の動かし方などの情報も伴われ、泣き方が激しいと解釈することができる。

- (12) 女孩 哇 地 哭 了 起來。
 nūhai wa de ku le qilai
 女の子 V ADVL 泣く PFV -はじめる (女の子がわっと泣きはじめた)

4. 様態の指定：音象徴的観点

前節では、音源の特徴から擬音語の様態の指定による制約を検討した。本節では、氣息の有無による対立性の低さを検討し、中国語擬音語の子音が持ちうる様態情報を考察する。

4.1. 無氣・有氣による対立性の低さ

1 節で述べたように、中国語の擬音語の無氣・有氣の対立が表す音象徴は、日本語オノマトペの無声・有聲と比較されることが多い。しかし、以下で説明するように、中国語の擬音語において、氣息の有無による対立性は非常に低い。

日本語のオノマトペに関して、鈴木 (1962)、泉 (1976)、Hamano (1998)、武田 (2001)、田守 (2002) などによると、無聲音は、軽小・繊細・明快などのイメージを持ち、有聲音は粗大・強力・不快などのイメージを持つ。これらのイメージは音のみではなく、音源や音源の動きにも反映されるという。動きに関しては、例えば、次の (13) に示すように、「かちゃん」は<軽く><弱く>、「がちゃん」は<強く><勢いよく>といった様態の指定を持ち、一方で他方を言い換えることはない (cf. (1) と (2))。

- (13) a. 彼は受話器をかちゃんと{ 軽く／*力強く }置いた。
 b. 彼は受話器をがちゃんと{ *軽く／力強く }置いた。

日本語のオノマトペでは、上述したような音韻的対立および意味的対立を持つ語が多く観察される。角岡 (2007: 217-264) に収録されているオノマトペから無声頭子音 /p//t//k//s/ と有聲頭子音 /b//d//g//z/ を持つ擬音語 662 語について見ると、音韻的に対立する語は 418 語あり (例えば、「かちゃん」「がちゃん」「しゅーっ」「じゅーっ」)、そのうち意味的にも対立するものは 388 語もある (例えば、「かちゃん」「がちゃん」)。このような音韻・意味の両方で対立を持つものは 662 語中約 58.6% を占めている。

一方、中国語の擬音語ではこのようなものは少ない。本稿では、野口 (1995) に収録されている無氣・有氣頭子音を持つ擬音語 176 語を対象に考察した。そのうち、音韻的に対立を持つものの数とその例は次の表のとおりにまとめられる。

表 1 中国語における無気・有気の音韻的対立を持つ擬音語とその語数

	対立する語数	音韻的に対立する／しない事例					
閉鎖音	無気 /b/ : 12	<i>ba</i>	<i>bo</i>	<i>bugu</i>	* <i>bala</i>	* <i>buci</i>	
	有気 /p/ : 12	<i>pa</i>	* <i>po</i>	* <i>pugu</i>	<i>pala</i>	<i>puci</i>	
	無気 /d/ : 6	<i>da</i>	<i>di</i>	<i>ding</i>	<i>dili</i>	<i>dulu</i>	
	有気 /t/ : 6	<i>ta</i>	* <i>ti</i>	* <i>ting</i>	* <i>tili</i>	* <i>tulu</i>	
	無気 /g/ : 11	<i>ga</i>	<i>gu</i>	<i>guji</i>	* <i>gaca</i>	* <i>geng</i>	
	有気 /k/ : 11	<i>ka</i>	* <i>ku</i>	* <i>kuji</i>	<i>kaca</i>	<i>keng</i>	
破擦音	無気 /z/ : 2	<i>zi</i>	<i>ze</i>	<i>zizha</i>	* <i>zala</i>	* <i>zileng</i>	
	有気 /c/ : 2	<i>ci</i>	* <i>ce</i>	* <i>cizha</i>	<i>cala</i>	<i>cileng</i>	
	無気 /zh/ : 4	<i>zhiliu</i>	<i>zhiga</i>	<i>zhigu</i>	<i>zhiniu</i>	<i>zhiya</i>	
	有気 /ch/ : 4	<i>chiliu</i>	* <i>chiga</i>	* <i>chigu</i>	* <i>chiniu</i>	* <i>chiya</i>	
	無気 /j/ : 1	<i>ji</i>	<i>jiu</i>	<i>jigu</i>	<i>jigua</i>	<i>jiang</i>	
	有気 /q/ : 1	<i>qi</i>	* <i>qiu</i>	* <i>qigu</i>	* <i>qigua</i>	* <i>qiang</i>	
合計		72					

左と右の欄に示したのは、音韻的対立をなす擬音語の数と対立の有無の事例である。例えば、*ba* と *pa* の両語は音韻的に対立するものである。一方、**bala* という語は存在しないため、*pala* は対立を持たない。176 語のうち音韻的対立を持つものは 72 語観察された（日本語では 662 語のうち 418 語）。

音韻的対立を持つものには、意味が異なっている例が多く観察された。以下の例を見てみよう。

- (14) a. *butong* : ①物が落ちたときの接触音 ②心臓の動く音
b. *putong* : ①物が落ちたときの接触音 ②心臓の動く音
- (15) a. *ba* : ①物が打ち当たる音 ②クラクションの音
b. *pa* : ①物が打ち当たる音 ②物が破裂する音
- (16) a. *da* : ①電子音 ②液体が滴る
b. *ta* : 歩くときの足音
- (17) a. *ga* : 物が軋る音
b. *ka* : 物が当たる音
- (18) a. *zi* : 水気の多い物が焼けたりするときの音
b. *ci* : ①摩擦する音 ②紙などが破られた音

(14) の *butong* と *putong* はどちらも物が落ちたときの音と心臓の動く音を表すものであり、意味的に対立が見られる事例である。(15) の *ba* と *pa* は一部の意味のみが対立している事例である。そして、(16) - (18) は意味が完全に異なる事例である。

表 1 の結果に加え、音韻的にも意味的にも対立を持つものを確認した結果は表 2 にまと

める（(15)のような、意味が一部重なるものも意味的対立を持つものとして見なす）。

表2 中国語における無気・有気の音韻・意味的対立を持つ擬音語とその語数

	閉鎖音						破擦音						計
	/b/	/p/	/d/	/t/	/g/	/k/	/z/	/c/	/zh/	/ch/	/j/	/q/	
音韻的対立	12	12	6	6	11	11	2	2	4	4	1	1	72
音韻的・ 意味的対立	9	9	3	3	7	7	2	2	1	1	0	0	44

考察対象である 176 語の擬音語のうち、音韻的・意味的対立を持つものは 44 語であり、25% を占めている。この割合は日本語（58.6%）に比べて有意に低かった（カイ二乗検定では $\chi^2(1)=61.52, p<.001$ ）。

中国語の擬音語における無気・有気による対立性の低さについて、2 つのことが考えられる。1 つ目は、母音による対立のほうが卓立しているという可能性があることである。2 つ目は、無気・有気の対立から様態の指定を検討する有効性が低いということである。

1 つ目に関して、開口度による音象徴的意味を見ると、例えば、中国語の金属音を表す *ding* と *dang* では、前者の音が小さくて高く、後者の音が大きくて低いという印象を持たせることが多い（実験的調査に関しては、Lapolla 1994、篠原・川原 2013 など参照）。ただし、中国語音韻体系の制限が対立を限定的なものにする可能性がある。例えば、笑い声を表す *ha* と *he* では、音量的により大きい／小さいという区別はあるが、*hu* が笑い声を指すことはなく、また *hi* と *ho* 両者の発音が中国語に存在しないため、*h*/ を頭子音として持つ笑い声を表す擬音語は日本語ほど多様ではない（ $\emptyset$ ：中国語の音韻体系に存在しない発音）。同様に、接触音を表す *ka* は存在するが、対立が想定しうる **ke* と **ku*、**ki* と **ko* は存在しない。これらのことを考えると、母音がどの程度の対立性に関わっているのか深く検討する必要があると言える。これに関しては別稿に譲る。

2 つ目の無気・有気の対立に関しては、語彙レベルの対立（*guanglang* と *kuanglang* のようなミニマルペア；1 節も参照）ではなく、音素レベルの対立の観点から見直す必要があると思われる。このことは次節で検討する。

4.2. 息の流れによる音象徴的意味

中国語の音韻体系において、無気音と有気音の違いの 1 つとして、後者は強くて速い息の流れを伴う発音であることが挙げられる。この点は摩擦音と類似している。摩擦音も調音点の隙間から息を無理やり出そうとするものであり、空気の速い流れを伴うものである。中国語の擬音語は、この息の流れの速さが利用され、音象徴的に動きの速さに結びつくと思定できる。すなわち、有気音（有気閉鎖音と有気破擦音）と摩擦音は＜速く＞という様態の指定を持ちやすいということである。もしそうであれば、これらの頭子音を持つ擬音語は、単純形（A 型、AB 型）の場合、速い動きを意味する「一下」（2 節も参照）と共起しやすいはずである。本稿では以下のような仮説を立て、検証を行う。

仮説：有気閉鎖音（/p/t/k/）・有気破擦音（/c/ch/q/）・摩擦音（/x/s/sh/h/）を頭子音として持つ A 型と AB 型擬音語は、速い動きを表す「一下」と共起しやすい。

はじめに、考察対象について説明する。本稿では、野口（1995）に収録されている A 型と AB 型の擬音語から、音源の動きが明確ではないもの（例えば、電子音、機械音、声など；3 節を参照）と、CCL の検索の結果、見つかった例が 30 例未満のものを除外し、残りの 70 語を考察対象にした。

次に、考察方法として、共起語数と頻度数を見るために2つの手法を用いた。まず、CCLから各対象語と「一下」の共起の有無を調査した。次に、用例を多く収集するために、Googleから各対象語の「一下」との共起頻度を調査した。

CCLを用いて70語の対象語と「一下」の共起を考察した結果は表3に示す。有気閉鎖音・有気破擦音・摩擦音を頭子音として持つ擬音語が「一下」と共起するものは26語、しないものは7語であり、一方、それ以外の頭子音 (/b//d//g//z//zh//j/) の場合では、それぞれ12語と25語であった。カイ二乗検定により、息の速い流れを持つ頭子音が「一下」と共起することが有意であることが確認された ($\chi^2(1) = 13.29, p < .001$)。

表3 頭子音の種類と「一下」の共起有無の語数

「一下」と：	共起する	共起しない	合計
頭子音種類：			
有気閉鎖・有気破擦・摩擦	26 (78.8%)	7 (21.2%)	33(100.0%)
それ以外	12 (32.4%)	25 (67.6%)	37(100.0%)

共起頻度から見ても同様の傾向が示された。本稿では、Google 検索エンジンを用い、「擬音語 + (的) 一下」をキーワードとして各対象語を検索した。用例収集に関しては、ここ1年間 (2012年12月1日から2013年11月30日) で使用された用例を対象にした。その結果、有気閉鎖・有気破擦・摩擦音を頭子音として持つ33語の擬音語については、「一下」と共起する用例の数が全部で10671あり、1語あたりの平均用例数が323.4であった。一方、それ以外の頭子音を持つ37語の擬音語では、用例数が全部で6616あり、1語あたりの平均用例数が178.8であった。t検定により、両者の間の差が有意であることが確認され、仮説を支持する結果を得た ($t(68) = 3.412, p < .001$)。

以上の考察より、中国語の擬音語では、音源の物理的な動きの速さは息の流れの速さに象徴されていると考えられる。

4.3. 完全に様態として使用される表現

様態の指定を持つものの一部は、擬音語の範疇から離れ、完全に様態として使用されることがある。以下の(19)–(23)の各語は、基本義における様態の<物理的な動きの速さ>という指定が利用され、<抽象的な変化の速さ>を表すようになった例であり、物理的な音の発生は認められない (用例はGoogleから収集したもの)。

(19) *ceng* : 固体物の速い摩擦による音

收視率 噌 的 一 下 往 上 漲。
shoushí lǜ ceng de yī xià wǎng shàng zhāng
視聴率 速く QUOT 1 CL=回 向かう 上 高まる
(視聴率がぐんと上がった)

(20) *shua* : 固体や流動体の速い摩擦による音

臉 唰 的 一 下 變 白 了。
liǎn shuā de yī xià biàn bái le
顔 速く QUOT 1 CL=回 変わる 白い PFV
(顔がさっと白くなった)

- (21) *hua*: 大量の液体が速く流れるときの（摩擦）音
 血 嘩 的 一 下 湧進 脳門。
 xie hua de yi xia yongjin naomen
 血 速く QUOT 1 CL=回 上る-入る 脳 （血が一瞬頭に上る）

- (22) *sou*: 気体が速く流れるときの（摩擦）音
 大家 嗖 的 一 下 不 見 了。
 dajia sou de yi xia bujian le
 みんな 速く QUOT 1 CL=回 消える PFV
 （みんなさっと居なくなった）

- (23) *pa*: 物体が（一瞬）破裂する音
 花蕾 啪 的 一 下 瞬間 開放。
 hualei pa de yi xia shunjian kaifang
 花の蕾 速く QUOT 1 CL=回 一瞬 開く （花の蕾がぱっと開いた）

これらの語は、擬音語から擬態語へと意味が拡張したものと考えられる（野口 1995 cf. 角岡 1993）。ただし、このような事例は多く観察されず、日本語の擬音語に比べて遥かに少ない（游 2012a も参照）。

5. まとめ

本稿では中国語の擬音語を対象に、音源の動きによる様態の指定を考察した。まず、音源の性質から見ると、動きを伴わない擬音語は音量や音質の指定を持つが、様態の指定は持たない。また、子音の氣息有無による動きの強さの指定を持つものは観察されないが、考察により、有気音（有気閉鎖音と有気破擦音）と摩擦音は、音象徴的に動きの速さに結びつきやすいことが本稿の考察から明らかになった。これは、息の速い流れが伴われることに起因すると考えられる。

音は動きの強さや速さといった様態を含意するというから見ると、日本語では＜強さ＞という様態の側面をとる言語であり、中国語では＜速さ＞の側面をとる言語であると考えられる。この事実は、日中両言語において、擬音語が表す音に対する認識の仕方に大きな差異が存在するという示唆する。今後の課題として考察していきたい。

注

1 表意文字を使用する中国語では、擬音語を表す際、意味と切り離した音だけを借用する、あるいは擬音語専用の文字を用いる。そのため、文字のゆれが多く見られる。例えば、*ba* という擬音語には「叭」「吧」を使用するのが一般的である。分かりやすいように、本稿では便宜上、例文以外ではすべて拼音で表示することにする。

2 本稿で使用する略語を以下に示す。

ADVL	adverbializer	副詞化
CL	classifier	量詞／類別詞
LOC	locative	位格
PFV	perfective aspect	完了相
QUOT	quotative	引用
S	sound	音を表す擬音語
V	voice	声を表す擬音語

3 音の発生に関わる事象に関して、游 (2012b) は、Fillmore (1977, 1982) が提案しているフレームという意味論的観点から擬音語を検討している。その要点は、擬音語が表す音には、使役者／使役事象、

働きかけ、音源、音の発生法、様態といった多くの要素が関わるということである。「旗がばたばた揺れている」のような、「ばたばた」が付随音として使用されるのは、音の発生法（揺れる）が文脈に現れるからであると考えられる。

4 中国語においては、全体的に発生音として表現されることが多い（游 2012c）。ただし、単純形（A型とAB型）と重複形・多音節形（AA型、ABAB型、AABB型、ABCD型など）を比較すると、後者では付随音の用法が多く観察される。

5 事例が多くはないが、次の例文AとBのように、後接動詞の情報が量詞の選択に反映される場合も見られる。

- A. 叭嗒 一口 吃下。 B. 噔 的一 拳 打 過去。
 bada yi kou chixia deng de yi quan da guoqu
 S 1 CL=口 食べる-入る S QUOT 1 CL=拳 叩く 過ぎる-いく
 （ぱくっと食べる） （どんと叩く）

6 岡 (2001)では、「一下」は視覚的に知覚される速い変化を表すと主張されている。速い変化を表すことは確かであるが、「喉通一下」（心臓がどきっと（動く））のような視覚性が極めて低い例も頻繁に使われることから、厳密には動きの変化として考えるほうが妥当であろう。

参考文献

- 泉邦寿. 1976. 「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現』105-151 大修館書店.
 香坂順一. 1983. 『中国語の単語の話—語彙の世界』光生館.
 角岡賢一. 1993. 「日本語の「疑似オノマトペ—日本語と中国語の接点—」 笈壽雄・田守育啓編『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』145-218 勁草書房.
 角岡賢一. 2007. 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版.
 関兴礼. 2002. 「拟声词与“一声/一下 V”的组配关系[擬音語と「一声／一下 V」の組み合わせ関係]」『山东师范大学学报（人文社会科学版）』47: 49-52.
 篠原和子・川原繁人. 2013. 「象徴の言語普遍性」篠原和子・宇野良子(編)『オノマトペの研究の射程 近づく音と意味』43-57 ひつじ書房.
 鈴木孝夫. 1962. 「音韻交替と意義分化の関係について—所謂清濁音の対立を中心として—」『言語研究』42: 23-30.
 武田みゆき. 2001. 「擬音語の語彙化に関する日中両言語の特徴」『多元文化』1: 79-90.
 田守育啓. 2002. 『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店.
 田守育啓・ローレンス スコウラップ. 1999. 『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版.
 张恒悦. 2012. 『汉语重叠认知研究-以日语为参照系[中国語における重複形の認知的研究—日本語と対照に]』北京大学出版社.
 野口宗親(編). 1995. 『中国語擬音語辞典』東方書店.
 野口宗親. 1977. 「中国語擬声語の特質について」『熊本大学教育学部紀要』26: 15-24.
 新川忠. 1979. 「副詞と動詞とのくみあわせ」試論 言語学研究会(編)『言語の研究』173-202 むぎ書房.
 仁田義雄. 2002. 『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
 針生悦子・趙麗華. 2007. 「有声音と無声音を大小に対応づける感覚の起源—擬音語理解の日中比較」『心理学研究』78: 424-432.
 飛田良文・浅田秀子. 2002. 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂.
 北京大学中国语言学研究センター現代汉语語料庫[北京大学中国語学研究所現代中国語コーパス] <http://ccl.pku.edu.cn/corpus.asp>
 马庆株. 1998. 「拟声词研究[擬音語研究]」『汉语语义语法范畴问题[中国語における意味と文法の範疇に関する問題]』120-153 北京语言文化大学出版社.
 游韋倫. 2012a. 「日中両言語における擬音語の考察—意味拡張から見た特性をめぐって—」『日本認知言語学会論文集』12: 140-152.
 游韋倫. 2012b. 「フレームの観点から見る日本語の擬音語—意味と意味拡張を中心に—」『2012 日本語教育国際会議論文集』237-251.

- 游韋倫. 2012c. 「中国語の擬音語の表音性について」第 62 回日本中国語学会口頭発表 同志社大学.
- 李鏡儿. 2007. 『現代漢語擬聲詞研究[現代中国語擬音語研究]』学林出版社.
- 刘月华・潘文娛・故[韦华]. 1984. 『实用现代汉语语法[实用現代中国語文法]』外语教学与研究出版社.
- Fillmore, Charles J. 1977. Topics in lexical semantics. In Roger Cole (ed.) *Current Issues in Linguistic Theory*. 76–138. Bloomington: Indiana University Press.
- Fillmore, Charles J. 1982. Frame semantics. In the Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. 111–137. Seoul: Hanshin.
- Hamano, Shoko. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Lapolla, Randy J. 1994. An experimental investigation into phonetic symbolism as it relates to Mandarin Chinese. In Leanne Hinton, Johanna Nichols, and John J. Ohala (eds.) *Sound Symbolism*. 130–147. Cambridge: Cambridge University Press.